



菊陽西小学校 6年 荒木 晴風

「両親ともっと話したい」



自分で確かめて行動していきたい

ぼくは、今まで差別やいじめなどの人権問題に対して、無関心な人が多いなと感じていた。たとえ、関心があったとしてもうわさなどを広める人も多いなとも感じていた。なぜなら、水俣病問題を学習した時、うわさを信じて差別をしてしまう人がたくさんいたからだ。また、ぼくは、小学校で人権について学習するまで人権問題を知らなかった。テレビなどで水俣病問題など見たことはあった。しかし、その時の自分は深く知ろうとしなかった。

ところで、水俣病問題と

は、水俣病にかかった人とその家族に対しての差別などだ。水俣病患者とその家族が悪いわけではないのに差別された。水俣出身というだけで差別された人もいた。その差別された人は、水俣病患者が身内にいることを隠さなければならなかった。

では、なぜ差別されたのか。それは、うその情報を流した人、それを信じてうわさをさらに広めた人もいたからだ。もし、うその情報が流されたとしてもちゃんと確かめたら差別は起きなかった。水俣病問題は、深く調べなかつたり、関心が足りなかつたりしたことが原因で起こってしまったとぼくは思った。だから、この先、水俣病のような問題がまた起こるかも知れない。その時は、うそ

の情報やうわさを信じず、自分の目で確かめてから行動していきたい。

次に障がい者への差別問題について。障がいには視覚障がいや聴力障がい、嗅覚障がいなどがある。今は、障がい者差別解消法やバリアフリー化などが進んできている。しかし、まだ、車いすだから乗車を拒否されたり、アパートへの入居を拒否されたりするところもある。

ぼくの両親は耳が聞こえない聴力障がい者だ。ぼくは、昔、聴力障がいなどよく知らなくて、耳が聞こえないことに対して腹がたっていた。両親が聴力障がいなので、すれ違いもよくあった。両親と話するために手話や指文字を使わないと会話できなかった。だから、正直、会話するのも面

倒くさくて手話を覚えるのもやめた。だけど、人権学習の中で、障がい者の差別問題を学習して両親のことを考えた。まだまだ、ぼくは、聴力障がいのことについて無関心だったなと思っ

た。両親と聴力障がいのことについて知っているつもりだった。しかし、学習後は、障がい者問題をもっと深く学びたいし、知って、手話や指文字を使って、できるだけ両親と会話していきたい。両親は耳が聞こえないことでいろいろ苦労してきたし、子どもとも話しかかたはずだ。でも、ぼくは話すのを面倒くさいと思ってしまう。だから、

今まであまり両親と会話しただけで話していきたくいと思つた。また、障がい者問題を人権学習で学習する前に知っておかなければいけなかつたと後悔した。

これから、水俣病みたいな病気が出るかもしれないので、うその情報は信じない。その病気について関心を持っていきたい。そして、両親との会話をちゃんと手話でできるだけ覚える。今後、両親とすれ違うことがたくさんあると思うけど、話せば、絶対、絶対、わかり合えると思う。だから両親との会話を楽しく、怠らないようにしていきたい。

先生から

嘘の情報を信じないことはとても大切だと思います。インターネットが発達して誰でも情報を発信できる現代だからこそ自分で考えて判断していく必要があります。その力を磨いていきましょう。両親と話そうとする姿勢、素晴らしいと思います。まずは障がい者問題、手話などたくさん学び、実践に移していきたいと思います。ご両親もきっと喜ばれると思いますよ。私も一緒に学んでいきたいと思つています。

人権啓発標語

気がつこう 心のおくの 真実に

学校だより 56

菊陽南小学校

「後の世のため人のため」

菊陽南小児童の宝の一つに「馬場楠井手の鼻ぐり」があります。人知を尽くした「鼻ぐり」を知り、「鼻ぐり」を介して、児童が地域の方々とつながる貴重な機会が得られるから「宝」なのです。

11月19日(土)、3年ぶりの縮小版鼻ぐり井手祭で、本校の3・4年生が鼻ぐりを題材にした音楽劇を発表しました。ここに至るまでには町文化財ボランティアガイドの会をはじめ、たくさんの方々にお世話になっていきます。鼻ぐりのことをもっと伝えたいという感想をもった児童たちは、「後の世のため人のため」という400年前の人々の思いや願いを、きつと語り継ぐことでしよう。



音楽劇の一場面から

きくよう文芸 11月

菊陽句会報

- | | | | |
|----------------|-------|-----------------|-------|
| 淋しらの独りの庭の石路明り | 紫藤 祥子 | 吾に戯秋蝶妹のごとくあり | 寺尾千代子 |
| 鳥たちの来る日來ない日庭小春 | 曾我 育代 | ひとひらの風掬ひつ、銀彦散る | 田中 郁子 |
| 秋さぶや椅子に重なる親子猫 | 曾我トモ子 | 長旅の車窓は順に秋装ふ | 財津 早雪 |
| 夕映えの天涯地角阿蘇の秋 | 緒方チエ子 | 捨てがたき本をめくりて夜長かな | 原野レイ子 |
| 鍼の柄を支へに仰ぐ鱗雲 | 木村 信子 | 風の声水の声聞く芭蕉林 | 高橋 孝子 |
| さんま焼くだけの七輪倉庫から | 米山るみ子 | 転た寝す小春の空に寄り掛かり | 北川しんじ |
| 旅終へて安堵の帰宅石路明り | 吉田 幸子 | 胸中を語る人なき夜の長き | 佐藤 澄世 |

短歌会

- 秋の阿蘇古坊中に佇めるかの修験者も硫黄嗅ぎけむ
雨待ちてハウレンソウの種を播く明日の予報は数十ミリと
限りなく澄む青空に雲淡く流れ消えゆく時の間にして
山寺の鐘つきおれば晩秋の木々に吸われて余韻は消えゆく
枝揺するヒヨのそばには早咲きの白き椿が二輪咲きたり
刈田には二羽の白鷺舞い降りて踊るがごとく啄みており
水槽の中にメダカは泳ぎおりバラの花びらひとひら落ちた
- | | | | | | | |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| 有久 賢治 | 梅田 國雄 | 佐藤せい子 | 田中 成美 | 中村トシエ | 馬場 礼子 | 松本 東亜 |
|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|